

世代、障害を越えた参加型コンサート

音楽ジャーナリスト 渡辺和

2月26日の大規模イベント自粛要請以降、クラシック音楽界はライブ公演を中止してきた。6月半ばごろから各地で再開されたコンサートは、民間公共を問わず、ジャンルや自治体の方

イドラインに沿って膨大な時間と人出、コストを投じた感染防止策を行い、「新しい日常」における安全なイベント開催の模範例となっている。幸いにも8月上旬の時点で、3月の岐阜のア

マチュア合唱団練習場感染を除き、クラシック会場由来の大規模クラスター発生報告はない。コロナ禍がなければ東京2020大会開会式当日だった7月24日午後2時、上野の東京文化会館大ホールで「リラックス・パフォーマンス」が開催された。

この日もホール内外で嚴重な感染防止策が講じられる。正面ロビーにはマスクの上からフェイスシールドを着用した接客担当者が配され、介助や案内が必要な聴衆を誘導する。手指の消毒、サーモグラフィによる検温を経た聴衆は、チケットの確認を受け、自分でもぎり入場する。

当初、自由席で販売したチケットは全て振替先を個別に電話連絡の上、指定席に変更。定員2300余人を500余人に限った客席は一人空きの市松模様か、子ども連れの両親や演奏中の付き添いが必要な聴衆のために四席単位で、間隔を取った配席がされている。1階後方下手側客席には、簡易マッサイジ器のような機械が設置された席も。音楽の振動をライブで全身に伝えるキミックで、手話通訳と共に機材を提供する企業担当

者が控え、事前に申し込んだ20人ほどの聴衆に使用法を説明している。舞台上のオーケストラは、三密回避のセッティングを強調しない。照明が背景と天井に青い空と雲を投影し、難聴者向けに光の点滅を伴う開演ベルが響く。会場のざわめきがやまない中、2人のナビゲーターが登場。「このコンサートはあらゆる皆さんのため、だから完全な静寂でなくてもいい」とこやかに語りかけ、オーケストラのチューニングの説明。弦から管へと次々に音が渡り、指揮者が登場する頃には、聴覚以外の感覚に積極的にアプローチするこのコンサートでは、ざわついた空気も会場の一部と感ぜられてくる。

「来年の東京2020大会に向け」と、ナビゲーターがプログラムの特徴を説明。まずはリオから東京に五輪を運ぶブラジル人作曲家ヴィラローロボス作曲の《カピビラの小さな汽車》で、舞台が黄色く染まっっていく。ジョン・ウィリアムズのロス五輪ファンファーレが高鳴るや、五輪の輪がバックに光で浮かぶ。《天国と地獄》で徒競走、《ロ

ミオとジュリエット》でフェンシングと、音楽で競技が展開、旋律に身を委ねる《カヴァレリア・ルスティカーナ》間奏曲で小休止。意表を突くような佳曲も効果的に散りばめられ、東京文化会館の知見と高い制作能力が示された。

タイプライターが持ち出され、聴衆も膝をたたき一緒に音を作るミニワークショップとなる。舞台上のナビゲーターが客席の半分ずつを担当し、アンダーソンの《タイプライター》に合わせ聴衆を指導。ナビゲーターは単なる司会者ではなく、東京文化会館が育成し、館内外ワークショップやアウトリーチ事業等でも活躍しているワークショップ・リーダー。客席の様々な聴衆のリードも手慣れたものだ。

コンサートは残りつつも、「世代、障害を越えて楽しめるオーケストラ・コンサート」という副題にふさわしい、巧みに作り込まれたパブリック・イベントであった。思えば、「リラックス」の原語本来の意味は、「んびり」ではなく「規則を緩和し敷居を低くする」である。コンサートは主催者ウェブサイトでも8月下旬から無料配信されるので、客席の「リラックス」ぶりを確認していただきたい。

「世界を見渡すポーズ」と「輪を作るポーズ」を示し、打楽器と手拍子や膝たたきを練習。曲を締めくくる八木節が、客席全員参加の舞踏となる。静かに座って聴くというクラシックコンサートの壁が無理なく取り払われた。

ではテノールの声の力が客席を圧倒したものの、弱音の美しさを聴かせるフリテン《4つの海の間奏曲》ではざわつきが気になるのも事実。ワークショップ型演奏会で「聴くべき部分は静かに聴く」作品を紹介する困難さを改めて感じさせた。

今後の課題は残りつつも、「世代、障害を越えて楽しめるオーケストラ・コンサート」という副題にふさわしい、巧みに作り込まれたパブリック・イベントであった。思えば、「リラックス」の原語本来の意味は、「んびり」ではなく「規則を緩和し敷居を低くする」である。コンサートは主催者ウェブサイトでも8月下旬から無料配信されるので、客席の「リラックス」ぶりを確認していただきたい。



クラシックコンサートの壁が取り払われた会場©堀田力丸

「ホストシティが東京2020大会開幕を盛り上げるクラシック音楽ビッグナー向けの気楽な音楽会」にも思える。演奏時間が1時間ほどなのも、コロナ禍中クラシック公演の「途中休憩時間を取らない」という原則に従ったと見えなくもない。

「来年の東京2020大会に向け」と、ナビゲーターがプログラムの特徴を説明。まずはリオから東京に五輪を運ぶブラジル人作曲家ヴィラローロボス作曲の《カピビラの小さな汽車》で、舞台が黄色く染まっっていく。ジョン・ウィリアムズのロス五輪ファンファーレが高鳴るや、五輪の輪がバックに光で浮かぶ。《天国と地獄》で徒競走、《ロ

ミオとジュリエット》でフェンシングと、音楽で競技が展開、旋律に身を委ねる《カヴァレリア・ルスティカーナ》間奏曲で小休止。意表を突くような佳曲も効果的に散りばめられ、東京文化会館の知見と高い制作能力が示された。

タイプライターが持ち出され、聴衆も膝をたたき一緒に音を作るミニワークショップとなる。舞台上のナビゲーターが客席の半分ずつを担当し、アンダーソンの《タイプライター》に合わせ聴衆を指導。ナビゲーターは単なる司会者ではなく、東京文化会館が育成し、館内外ワークショップやアウトリーチ事業等でも活躍しているワークショップ・リーダー。客席の様々な聴衆のリードも手慣れたものだ。

コンサートは残りつつも、「世代、障害を越えて楽しめるオーケストラ・コンサート」という副題にふさわしい、巧みに作り込まれたパブリック・イベントであった。思えば、「リラックス」の原語本来の意味は、「んびり」ではなく「規則を緩和し敷居を低くする」である。コンサートは主催者ウェブサイトでも8月下旬から無料配信されるので、客席の「リラックス」ぶりを確認していただきたい。

リラックス・パフォーマンス鑑賞記

東京文化会館が企画制作

とはいえ、トリノ冬季五輪で知られる《誰も寝てはならぬ》

無料ストリーミング配信

東京文化会館 リラックス・パフォーマンス ～世代、障害を越えて楽しめるオーケストラ・コンサート～ 8月26日頃から下記ウェブサイトにて配信予定(終了時期未定) <https://www.t-bunka.jp/info/5492/>